

近代日本災害史研究プロジェクト

プロジェクト代表者：文学部・教授 山崎 有恒

本研究は日本近代史上の歴史的災害について研究し、その原因、被害、対策、影響などを明らかにしつつ、そこから浮かび上がる教訓を未来の防災に役立てようとするものである。

今年度は次の二つの計画により、進められた。

①京都の歴史災害データベースの作成

明治から昭和まで近代史のほぼ全域をカバーする地域紙『京都日出新聞』を題材として用い、そこから災害の記録を網羅的に抜き出してデータベース化する作業である。現在までに明治中期から昭和ゼロ年代まではすべて作業が完了しているため、残る明治期前半と昭和戦前期後半(十年代)に集中した。

今年度前期、研究代表者である山崎の台湾国立政治大学へのサバティカルにより、この第一計画は中断していたが、帰国とともに再構築を図った。しかしながら、山崎が台湾留学末期に大病を患い、帰国後入院・手術を必要とし、その後も体調がすぐれなかったことから、本計画は大幅に遅延した。それでも前年度のメンバーを中心に、『京都日出新聞』から歴史災害記事を収集する作業はこつこつと積み上げられたが、昨年度末で多くのメンバーが卒業したこともあって、総体の作業量は、予定の一部にとどまった。現在文学部の一回生、二回生の協力を得て、再度研究体制を構築しなおしているところなので、予定した研究計画は待年度末には無事完成しうるものと予測される。

②京都以外の代表的な歴史災害についての史料収集

京都における防災の歴史を相対化して論じるために、他の地域で起きた災害との比較検証を行うことを目的とし、そのために基礎データとなる史料を収集しようというのが当初の研究計画であった。当面は関東大震災を主たる研究対象とし、東京の国立国会図書館をはじめとする史資料館への出張調査が中心となる。

今年度後期に主として研究代表者の山崎が中心となってこの研究計画は勧められた。山崎の体調不良により必ずしも計画が順調に進められたとはいいがたいが、それでも東京・横浜を中心に数回出張調査を実施しえた。史料調査の実施先としては、国立国会図書館、東京都立図書館、神奈川県立図書館、横浜開港資料館、横浜市立図書館などであるが、その中でも横浜市立図書館地下の横浜市史資料室所蔵の膨大な関東大震災関係資料が主たる調査先であった。この資料室は『横浜市史』を編纂した際に収集された膨大な資料群を保存・活用するために設置されたものであるが、東京とともに大きなダメージを受けた横浜に関する貴重な資料群が多数含まれ、それらから新たな知見が多く得られたことは収穫であった。

この分野の研究に関しては、次年度も着実に進めていきたいと考えている。

なお、本年度当初の研究計画になかった次の研究についても一定の成果があったので合わせて報告しておきたい。

今年と前期に研究代表者の山崎は台湾国立政治大学台湾史研究所でのサバティカルに従事していた。その間、当初の研究計画が予想以上に順調に推移した事により、追加で別課題の研究計画に取り掛かった。それは植民地期台湾における歴史災害実態及び災害対策について史料収集を行うというものであった。そうした研究に取り組んだ理由は、「本国でのすべての経験は植民地に集約される」（『インドの大地と水』より）という指摘もあるように、近世近代以降期に伝統と革新のはざままで試行錯誤した日本の防災体験が、三十年後の台湾において、どのような「結論」ともなって施行されたのかは、近代日本災害史について検討していくうえで極めて重要な知見となると考えられたからである。

本件に関して、今年度前期のサバティカル中に、台湾図書館、台湾国立中央研究院図書館、国立台湾大学図書館、国史館、国立政治大学図書館などを中心に史料収集を行った。収集したのは、台湾総督府の公文書、『台湾日日新報』記事、さらに政治家官僚などの個人史料（日記、書簡、書類、メモなど）中に含まれる災害関係資料である。この分野についても今後も研究を推進し、いずれ何らかの形で論文執筆や学会報告を行いたいと考えている。